

カトウツルスのアンビヴァレンス——ウェーローナとローマの間で——

岩崎 務

一 はじめに 恋愛エレゲイア詩

古代ローマの恋愛エレゲイア詩と呼ばれるジャンルにおいては、男性の詩人が、現実のことであれ、架空のことであれ、ある一人の女性に対する自分の恋愛を一人称で語る。いわゆる「主観的恋愛詩」のスタイルであるが、古代ギリシア・ローマを通じてそのような詩の先駆けとなったのがガイウス・ウァレリウス・カトウツルスであり、レスビアと呼ぶ女性との恋のありさまを自己の経験として歌い、恋人に対する自分の真情を吐露した。

Lucundum, mea uita, mihi proponis amorem
hunc nostrum inter nos perpetuumque fore.
di magni, facite ut uere promittere possit,
atque id sincere dicat et ex animo,
ut liceat nobis tota perducere uita
aeternum hoc sanctae foedus amicitiae.

喜ばしい愛を、ぼくの命よ、君はぼくに申し出てくれる、互いに交わすばくたちのこの愛が永遠に続くことを。大いなる

神々よ、彼女が真実となる約束をなしうるようにし給え、そしてそれを偽りなく心から言うようにし給え、ぼくたちが生涯にわたって、この終生の神聖な友情の契約を貫き通すことが許されるために。(第一〇九歌)¹

このような詩には、詩人が恋愛というものに対して抱いていた理想の表明を見ることが出来る。すなわち、恋愛による男女の関係は、相互的で、終生にわたる永続的なものであり、情熱を伴った誠実な行為によるものであるべきであり、そうあることを詩人は願っている²。また、この関係は「神聖な友情の契約」とも言われる。いささか恋愛を表現するには適さないとと思われる言葉であるが、これに関しては、詩人が恋愛の少なくともある側面をアミーキティア(友情)の一種とみなしていたことが指摘されてきた³。アミーキティアとは、伝統的にローマの貴族的階級の人々の間で育まれ、尊重されてきた倫理的、美的規範であり、男子と男子との間で遵守されるべき関係である。

この関係を表わす一連の用語が存在し、次の詩にはそれらの用語がより明確に使われている。

Siqua recordanti benefacta priora uoluptas

est homini, cum se cogitat esse pium,
nec sanctam uiolasse fidem, nec foedere nullo
diuum ad fallendos numine abusum homines,
multa parata manent in longa aetate, Catulle,
ex hoc ingrato gaudia amore tibi.

もし人が以前に尽くした誠を思い出すときに、自分は徳義を守り、神聖な信義を冒したことも、いかなる契約においても人を欺くために神々の権威を悪用したこともないと考えて、愉悦を感じるとすれば、多くの喜びがこの報われない愛から生まれて、カトウツルスよ、長い人生の果てまでお前のためが続くことになる。(第七六歌、一一六)

「誠 (benefacta)」、「徳義を守る (pium)」、「神聖な信義 (sanctam..fidem)」、「報われない (ingrato)」といった言葉がそれにあたる。カトウツルスは、従来ローマ社会では純粋な恋愛は成り立ちにくく、上流階級における結婚は政略的意図によるものが多く空虚なものであったという状況の中で、自分たちの恋愛のあり方、そして新しい恋愛の可能性を歌おうとした。しかし、そのような恋愛の位相はこれまでに表現されることがなかったものであり、新しい言葉が必要としたが、そこで詩人が見出したのがこれらアミーキティアに関連する用語であった。ヘレニズム時代のギリシア詩において恋愛を遊戯的に歌うのに盛んに使われたエレゲイア詩形に乘せて、これらの言葉を用いて真剣に自己の恋愛を表現することは、たいへん実験的な試みであった。そして、それはまた、恋愛に現を抜かすな

どということとはれつきとしたローマ男子にとつて最も恥ずべきことであり、恋の詩を作るなどは、座興としてまさに人生の余った時間になされるべき手慰みであるとして白い目を向ける世間に対して、恋愛が単なる遊びではなく、大人が献身するに値することであり、一時の欲情に動かされるだけではない倫理的な意味を持ちうる行為であることを示し、そして、自分たちの新しい価値観を主張することでもあった。たとえ、遊女を相手にしても、あるいは、人目を忍ばねばならない不義の恋であつてさえも、詩人にとつては、それはある種の倫理が支配する関係に抛るものであり、そうでなければならなかった。このようなカトウツルスの恋愛詩、とりわけ、エピグラムと呼ばれるエレゲイア詩は、その実験的性格から詩的表現としては必ずしも明快なものではないが、恋愛と恋愛詩に新しい地平を開いたものとして若いローマ人たちには新鮮に受け取られたに違いない。実際、カトウツルスの敷いた道を進む詩人たちが現われ、一ジャンルを形成することになったのである。

もう一度第一〇九歌に戻ってみれば、ここでは、アミーキティア的な関係としての恋の永続を約束してみせたのは、恋人レスビアであった。しかし、カトウツルスは彼女からのうれしはずの約束を大いに疑っている。「真に」、「誠実に」、「心から」といった強調の言葉のしつこいほどの積み重ねが、逆にそれを明らかにしている⁴。結局は破局に至るところまでが一連の詩によつて描かれることになるこの恋の相手は、カトウツルスが理想的に思い描く恋愛関係にふさわしい人ではなかったし、アミーキティアのルールを忠実に守るような女性ではなかったようである。しかしながら、そうだからといってカトウツルス

の情熱はすぐに冷めることはなかった。むしろ、そのような女性だからこそ、詩人には自分の感情と欲望がいつそう高まるのが感じられた。そこが恋愛の不思議なところであった。次のような詩句はそのような精神的状態を表現している。

nunc te cognoui: quare etsi impensius uror,
multo mi tamen es uilior et leuior.
qui potis est, inquis? quod amantem iniuria talis
cogit amare magis, sed bene uelle minus.

今ぼくには君のことがわかった。だから、ぼくはいつそう激しく燃えているが、しかし、君はぼくにとつて前よりはるかに安く、軽い。「どうしてそんなことがありうるの」と君は言う。なぜなら、このような不実は、恋する者の愛をいっそう大きくはするが、好意は小さくしてしまうからだ。(第七二歌、五—八)

Huc est mens deducta tua mea, Lesbia, culpa
atque ita se officio perdidit ipsa suo,
ut iam nec bene uelle queat tibi, si optima fias,
nec desistere amare, omnia si facias.

ぼくの心は君の罪で、レスビアよ、こんなところにまで来てしまひ、自らの献身によつて自分を破壊させてしまつた、もはや、君が聖人となつても君に好意を持てず、君が何をしようと愛することをやめられないほどに。(第七五歌)

このような恋愛におけるアンビヴァレントな感情はとくにエピグラムにおいて分析の対象になっているが、レスビアを歌う長い詩においても詩人の心の揺れが現われる。第六八歌では、レスビアは女神ウェヌスに比べられ、さらにラーオダメアとプロテーシラーオスの神話を引用して賛美されるが、一方では、実は、カトゥッルス一人に満足はしていないことが告白される。そして、なおかつ詩人は、アミーキティアという原則を放棄するかのうちに、そのような恋人を「すばらしい夜にひそかな贈物を与えてくれた」(一四五)として容赦してしまうのである。

カトゥッルスの恋愛詩に見られるアンビヴァレンスについては、恋における苦悶の真剣な告白が詩人自身の実際の恋愛体験に基づいていると思われ、その真実性ゆえに、エレゲイア形式の持つていた遊戯的な性格や従来の恋愛詩のトポスを脱却することが不可避となり、ここにおいて内省的な抒情詩が生まれているという評価がなされてきた⁵⁾。カトゥッルスにおける真の抒情詩の誕生が、詩人自身による自己の内面の凝視によるものであったことは確かであろうが、本論では、このカトゥッルスにおけるアンビヴァレンスを少し違った観点から見てみたい。それは、詩人の故郷である北イタリアの都市と、共和制末期の混乱と退廃の中にあつた都ローマとが、詩人とその詩作に及ぼした相互作用という見方である。カトゥッルスは十八歳のころにローマに出て、政治家としての立身出世を願う父親の思いとは裏腹に、文学の道を志すことになり、やがて社交界にも出入りするようになった。カトゥッルスが歌う恋人「レスビア」

は、彼の恋愛詩にとどまらず、恋愛エレゲイア詩というジャンルの生みの力となったと言つても過言ではないが、そのモデルであると目されている實在のクローディアは、名門貴族の女性であり、社交界の花形とも言える存在であつた。このローマがカトウツルスカトウツルスの詩作の場所であつたが、一方、折々故郷へ帰ることを続けていたことは詩の内容から窺え、家との連絡は絶やさなかつたようである。家督の後継者である兄の病死は、大きな悲しみと打撃を詩人にもたらした⁶。のちに触れるように、カトウツルスの家郷はローマ以上にギリシアや東方世界とつながりを持つていたようであり、兄が病死したのも小アジアのビーテューニアに滞在していたときのことであつた。

一方にはカトウツルスの故郷とその風土、そしてそこから見えるヘレニズムの世界、他方には一見華やかなローマの都市空間、これらの間の往還がカトウツルスの詩に及ぼしている作用を以下で検討してみよう。

二 故郷ウエーローナ

カトウツルスは、紀元前八四年ころに北イタリアの都市ウエーローナウエーローナ（現在のヴェローナ）で、地方の裕福な名家⁷に生まれた。詩人は、自分を含めて故郷の人々を「トランスパダーヌス」（「ポー川の北側に住む」人）と呼んでいる⁸。この地は、カトウツルスの時代にはまだ属州「ガリア・キサルピーナ」の一部であり、紀元前四九年にローマ市民権が拡大されて与えられるまでその呼び名は続いた。政治的にはローマ国外とされて

いたわけである。アルプス山脈とアペニン山脈に挟まれた地域であるガリア・キサルピーナには紀元前四〇〇年ころにケルト人が侵入し、以来略奪を繰り返して、イタリアの安全にとって常に脅威となってきた。ローマはこの脅威を完全に取り除くべく、ついに紀元前二二四年からの数年間の遠征でこの地域を制圧して併合した。ハンニバルの侵入によって再び領地を失うということはあつたが、二世紀の中頃にはこの北イタリアの平原に残留しているケルト人は極めて僅かになっていた。

ローマの共和政期におけるウエーローナの歴史については知られることが少ないが、ラエティイ人が建設したようであり、その後、エウガネイイ人、さらにはケルト人のケノマーニ族の町へと変遷した上で⁹、ウェネティイ人の支配地となつていた。しかしながら、紀元前三世紀末にかけて移動を開始していたゲルマーニア人のキンブリー族とテウトネース族がイタリアの属州に侵入し、一〇二年ころにはポー川流域を目指して南下し、この地はその通り道となつた。住民たちは逃亡し、これらゲルマーニア人たちが北イタリアの一角を一時占拠し、略奪をほしきままにした。だが長くは続かず、マリウス率いるローマ軍が一〇一年にウエルケッラエの戦いでキンブリー族を撃破して占領地を取り戻し、無人となつていた土地を植民のために分割し配分したものとされる。最も有利な土地分配に浴したのはこのローマ軍の退役兵たちであつたろうが、八九年には植民は *colonia Latina*¹⁰ として組織的に行なわれるようになり、各地の軍事的拠点が改めて植民地統治の中心として都市へと拡充・整備され始めた。このことから、メデイオラーヌム（現在のミラノ）のようなのちには大都市へと発展していく町

が生まれることになったが、ウェーローナもそのような町のひとつであった。

このように、ポー川以北は、長らくケルト人やゲルマーニア人などの異民族が侵入を繰り返してきた地域で、ローマにとつての北のフロンティアであつたわけである。トランスパダーヌス人とは、これら異民族の蹂躪を被つてきた土地の入植者たちが自分たちにつけた呼び名であつた。彼らは急速に繁栄し、自分たちの達成に非常な自信と誇りを持つようになるが¹¹、その要因は、ひとつには、北イタリアの肥沃で広大な農地の恩恵であつた。そしてまた、略奪を続けてきた野蛮な民族を食い止め、完全に屈服させた栄えある勝利の上で入植したという状況が大きく影響したろうと想像される。キンブリー族は莫大な戦利品を蓄えていたはずであるし、それは彼らの敗戦で生じた多量の安価な奴隷労働力とともに、新しい入植者たちの経済的発展の基盤になったことであろう。

ところで、カトウツルスの家は祖先代々このウェーローナに住み続けてきたというわけではなさそうである。トランスパダーナの土地は、退役兵たちの入植を満たしておおまだ十分に余裕がある広さを持ち、もとの居住者が呼び返されたり、アペニン山脈の南の中部イタリアからも多数の移住者があつたことが推測される。カトウツルスの家も出自は中部イタリアであつたらしく、恐らく祖父の代にこの新天地へと移つてきたと思われる¹²。

ワイズマンは、トランスパダーナの新住民たちの相当に多くが中部イタリアの出身であることが、この地域の非常に活気に富んだ新しい社会に大きく影響を及ぼしたとして、次の三点を

指摘している¹³。第一には、このころの中部イタリアの地方都市の多くはむしろローマよりもいつそうギリシア化されていたという事実である。したがって、その傾向はトランスパダーナの人々にも及び、自分たちの新しい共同体に誇りを抱いていた人々は、積極的にギリシアの文化と文芸を吸収し、自分たちの都市にいわば箔をつけ、格上げを図ろうとしたことが容易に想像できる。実際、この時期に、カトウツルスだけではなく、詩人や作家たちがトランスパダーナ地方から輩出してローマ文学をリードしたこともその証左である¹⁴。第二には、イタリアの地方都市の貴族といつていい上流階層は、ローマの元老院階級がその身分にふさわしくないとして商業や金融活動には直接携わることを禁じられていたのに対して、属州での商業や財政に大いに関与した。このこともトランスパダーナの上流階層に引き継がれることになり、この地域が、北はアルプス山脈を越えてケルト人の諸部族へと至る、東はアドリア海沿岸からギリシアさらには小アジアへと続く交易路の要衝であつたために、いつそう活発な商業活動を促すことになった。これらの地方貴族たちは、自分たちの経済的発展に自信を得た実業家であり、商業を通じて海外にまで及ぶ活動範囲を持つていて、広い視野を具えていた。第三には、イタリアの田園地帯の地域社会は、ローマ人の伝統的な道徳が最も根強く生き続けていたところであるということ。その道徳を体現していたのが、トウースクルムで生まれ、少年期の大半をサビーヌ地方の農家で過ごした大カトーであつた。カトーにとっては、いかに政治家あるいは弁論家として活躍するようになって、あくまでも家庭生活が人生の中心であつた。そして、その家庭においては、質

実と儉約をモットーとして家政を営み、召使・奴隷に至るまでの家人を厳しい法をもつて律することを貫いた¹⁵。ローマ人に古くからあるアミーキティアの観念も当然に尊重されていたであろう。このような倫理観もトランスパダーナに伝わったものと思われる¹⁶。

以上のような中部イタリアがトランスパダーナに及ぼす可能性のあつた影響を考えるならば、カトウツルスの育つた地方貴族の家の環境をある程度想像することができる。それは、農耕民族としてのイタリア人に伝統的な勤儉・実直を旨とするような道徳に従つて家庭生活を営み、その一方、商業活動によつて利益を売ることに積極的であり、そしてそこでは、公正な取引と責務の遂行を重んじるような人々の社会である。そして、彼らは肥沃な農地と安価な労働力に恵まれ、経済的に有利な地理的条件にあることによつて急速な発展を遂げ、自分たちの建設しつつある新都市¹⁷と地域に、イタリア人としての誇りと意気込みを大いに抱いていたであろう。この人々に古風な美德が生き続けていたことは、カトウツルスの恋愛詩に現われるアンビヴァレンスを考える手がかりとなるだろう。最初に述べたように、カトウツルスがレスビアとの恋愛を歌うとき、恋人との関係を一種のアミーキティアとみなし、この道徳に関連する用語を使い、レスビアに対し、アミーキティアに基づくような相互の恩恵と義務の履行を求めているかのようである。これは、現代のわれわれにとつては、恋愛関係を表現するには奇異な言葉の使い方であるように思われる。しかし、ウェーローナからまさに異郷と言つていいローマへとやつてきて詩人の道徳を選んだカトウツルスは、道徳の退廃が著しく進む中で、しか

し新しい形の恋愛の可能性が開けてきたメトロポリスにおいて¹⁸、従来の恋愛詩とは異なる恋愛詩を試みたのであつて、いわば、恋愛と恋愛詩の新たなフロンティアに挑んだのであつた。そのとき詩人がむしろ自然に頼つたのが、家郷の人々の暮らしを今も律して、詩人が育つていく中で身に染みこんでいたローマ人古来の実直を重んじる倫理観である。恋愛は愛欲の情の作用するところが大きくはあるが、一人の人間と一人の人間が関係を結ぶことであり、また、結ぼうと欲求することである。そして、カトウツルスは、これまでのローマのとくに上流階級に見られたような、愛情の希薄な形骸化した結婚、あるいは、男性が欲情を満たすためだけの一時的な女性との関係、あるいは、遊戯としての恋愛などではなく、独立した男女の自由な意志によつて結ばれる対等の関係の可能性を見出そうとしていた。そのような一対一の人間の関係を、どうにか一時的なものに終わらせず永続性を持ったものにするために依拠すべきものは、家郷の人々が新しい土地で社会を作っていく上で遵守してきたアミーキティアのルールである。そのようなカトウツルスが考えたとしてさして不思議ではないのではなからうか。その結果、新しい恋愛の形を歌い示すのに、古い道徳の言葉を持ち出すという、一見奇妙な詩が生まれたのである。それは逆に、カトウツルスたちトランスパダーナの人々にはそれらの道徳は死んではおらず生きていたということを示してもいい。

アミーキティアが生きていたという点では、カトウツルスの家が商業活動を広範に行なっていたであろう¹⁹ということも大いに関係するだろう。ローマの上流階級の人々が持ち合わせて

いない商人あるいは実業家としての感覚をカトウツルスは身につけていた。それは、有名な「千のキス」の詩からも窺えるだろう。

da mi basia mille, deinde centum,
dein mille altera, dein secunda centum,
deinde usque altera mille, deinde centum.
dein, cum milia multa fecerimus,
conturbabimus illa, ne sciamus,

ぼくにおくれよ、千のキスを、それから百を、それからまた千、そしてふたたび百、それから続けて千、そして百を。それから、何千もキスしてしまつたら、それをご破算にしてしまおう、ぼくたちにもわからなくなるよう（第五歌、七―

一一）

レスビアとのキスのやり取りをまさに算盤勘定しているが、儉約家で浪費を嫌い、勘定高いといった商人の性格を見せている詩句は、レスビアを歌ったのではない他のさまざまな詩にも見出せる²⁰。そして、たとえ、もらうことには貪欲だが与えはせず、約束を履行しないアウフィツレーナの行為は売春婦以上だとして、契約と義務を表わす言葉によつて非難されている（第二一〇歌）。また、アルフェーヌスのような、友人を欺いて平気であるような不実な男は、「信義」の女神の罰を受けて後悔することになるだろうとやはり糾弾されている（第三〇歌）。個人と個人の関係を築く基盤となる契約 (foedus) と信義

(fides) はカトウツルスが詩集の中で繰り返し表現し、強調しているテーマとなつてゐる。そして、この美德に倅る者たちは男女貴賤の別を問わず、口汚い言葉によつて激しく非難されている。これらのテーマと表現は、公正な取引を何よりも重んじる商人の精神が詩人の中に生きていて、それに由来していると考えられるだろう。また一方、大きく考えれば、当時の時代の趨勢というものの現われを見ることが出来るだろう。カトウツルスの家はギリシアや東方世界あるいはガリア地方へまで赴いて事業を行なつてゐたであろうことはすでに触れた。すなわち、彼らの活動の場は広いヘレニズム世界であつた。そこでは、従来の国家の枠組み、とりわけ小さな都市国家内で緊密で安定した社会を成り立たせていた束縛が取り払われることになつたのであり、代わつて意味を持つたのは、個人の能力や資質、そして従来の因習から解放された裸の個人と個人が結ぶ関係であつた。このような世界で活動する商人にとっては、相手が公正な取引をなしうる者であるのかどうか、契約を遵守して遂行するのかがどうかを見極めることが、何より重要であつたはずである。したがつて、ヘレニズム世界における個人的な人間関係の重要性、そして、それをとりわけ實際的に切実に感じ取つたであろう商人の意識というものも、カトウツルスの詩には現われていると考えられる。カトウツルスは、ローマという異なる世界へやつてきて詩人として活動し始め、新たな人間関係を築き始めたときにも、ウェーローナの土地で養われた、商人としての、そして、ヘレニズム世界で生き抜く人間としての感覚を貫いたのであろう。それは、恋愛詩において新しい恋愛のあり方を描こうとしたときにも同様であつたし、自立した人間が

結ぶ個人と個人の対等な関係という可能性と理想を見ていたから、なおさらそうであった。すると、先に示した第一〇九歌の「神聖な友情の契約」という言葉は比喩の表現ではなく、詩人の意識からすれば、まさしく契約であったと言えるだろう。

さて、これまで見てきたような経済的、道徳的土壌を持ち、ある種のフロンティア・スピリットとコスモポリタニズムの活気に満ちていたであろうウェーローナは、それ自体、古くて新しい、小さな共同体でありながら大きな開かれた世界と通じているという両面性を持った都市であった。一方、同盟都市などイタリアの地方都市の有力者層については、彼らがローマに向けた顔とその都市の民衆に向けた顔と、二つの顔を具えていたということが言われている²¹。有力者に複数の子供がいる場合には、年下の者がローマに上り、他の者たちは家郷に残る。そして、ローマに上った者は、ローマの貴族との結婚、もしくはローマでの官職就任を希望する。それを果たすことによつて、郷里の家門は格式と名声を高め、ローマ化することになる。このようにして、地方都市の貴族的階層は、一方では自ら進んで狭義のローマの中に取り込まれつつ、他方では地方都市に根は下ろしたままにしておくというわけである。このような定式は主として紀元前二世紀の同盟諸都市について考えられているようであるが、まだローマ市民権を与えられていなかったカトウツルス当時のトランスパダーナの諸都市についても当てはめて考えることはできるだろう。まさしく、カトウツルスは兄をウェーローナに残して若年にしてローマに赴いたのであった。そして、勉学を積んで官職に就き、出世の階段を登っていくことが家門の期待であつたろうし、それについては

十分な経済的支援が家郷からなされたであろう。しかしながら、カトウツルスは政治家としての道をそれて、期待された役割は果たさないことになる。有力者と姻戚関係を持つという点でも、名門貴族の女性クロデーアに恋することになるのであるが、結婚に至ることはなく、あくまでも情事と言つていい交際であつた。この間の詳しい事情は知ることができないが、カトウツルスは素直なローマ化を嫌つたのではなかつただろうか。家郷のローマ化、それは見方を変えれば、ローマの政治的、文化的な地方支配であり、そのひとつの道具となることのためにめらいがあつたということも想像できる。そしてカトウツルスが選んだのは、詩人の視点からローマをながめ、上流階級の社会に入っていくことであつた。ローマ文学では始まりのときから、詩人はパトロンを持つということがむしろ一般的であつた。有力政治家は、叙事詩や悲劇・喜劇に限られはするが、文学の政治的効用を認識し、詩人を養つておくことを習いとした。そのため、伝統的に文学は政治から独立することができず、詩人たちに閉塞感を生み出していた。カトウツルスの場合も、紀元前五七年、ガイウス・メンミウスの総督としてのビージェーニア赴任に随行しているので、この人物をパトロンとしていたと見ることができるが、メンミウスは、彼自身文学的活動もしたようであり、何より、カトウツルスも共鳴していたアレクサンドリアの文学思潮をよく理解し支持した人であつた²²。なので、従来のような政治的恩惑による庇護関係ではなかつただろう。また、カトウツルスの家は十分に裕福であつたので、経済的にパトロンに依存するということもなかつたはずである。したがって、詩人としての相当に自由な立場から、そして地方

都市からやってきた他者として、ローマ人とその社会を評することが可能であつたろう。

ここまで述べてきたことから、カトウツルスという詩人において、故郷ウェーローナとメトロポリスであるローマ、さらには大きなヘレニズム世界が交錯しているということがわかるだろう。そして、それぞれの社会・文化的な特性が詩人に作用している。家郷と自己のたやすいローマ化を嫌ったカトウツルスではあるが、クローディアのいるローマには否応なく魅了されたようである。今度は、ローマにやってきたカトウツルスのことについて考えてみたい。

三 ローマ

「トランスパダーヌス人」というのは、この時代のローマの人々、とりわけ上流社会の人々にとつては他者であつた。ローマ人がトランスパダーヌス人をどのような他者と見ていたか、自分たちとどのように違うと考えていたか、どのような偏見を抱いて遇したかについては、カトウツルスと同時代のキケローの演説『ピーソー弾劾』（紀元前五五年）がよく教えてくれる²³。この演説は、属州マケドニアの総督を務めたルーキウス・カルプルニウス・ピーソー・カエソーニヌスに対して、彼が属州総督として行なった不正と不法行為を暴いて糾弾したものであるが、ピーソーが執政官であつたときにキケロー追放の動きに手を貸したというところがあり、ローマに帰還したキケローによつてなされた意趣返しというのが内実であつた。この

演説がトランスパダーナと関わってくるのは、キケローが演説の中でピーソーの母方の祖父カルウェンティウスに触れているからである。この人物はもとポエ川上流の町プラケンティアの出身であり、ローマにやってきて貴族の青年に娘を嫁入りさせたのである。キケローはこのカルウェンティウスの出自を貶めてインスブレース人であつたとしている²⁴。インスブレース人はメディオオラーヌムあたりにいたケルト人の部族である。別のところでは、「メディオオラーヌムで競売人をやつていた君の祖父」と言つて、カルウェンティウスの職業にも言及している²⁵。さらにキケローは、ピーソー本人に向かつてこう呼びかけている。

しかし、肝腎のローマに、おお、カルプルニウス一族の、とは言うまい、カルウェンティウス一族の、またこの都の、とは言うまい、自治市プラケンティアの、また父祖代々の家系の、とは言うまい、ズボンを穿いた眷族の、名折れよ、君はどのように足を踏み入れたのか。（五三節）

ズボンはローマ人が通常着用するものではなく、ガリア人のような「蛮族」が身に着けるものとみなされていた。

このキケローの演説は遺恨を晴らさんとしてなされたものであり、「罵倒の演説（*oratio invectiva*）」と呼ばれるタイプの典型と言われるほど、全篇にわたって多種多様な罵倒語を織りまぜて、実に辛辣を極めた非難が展開されている。したがつて、当然ながら、相手を評する言葉には誇張が非常に強いのであるが、しかし、それを割り引いて考えても、これらピーソー

の出自に触れた言葉から、トランスパダーナの諸都市やその住民に対してローマの上流階層が一般に持っていたイメージを窺うことができるだろう。それは、メディアオラーヌムのような中心的な町であっても、かの地はさらに北方のガリア人たちが住んでいたところとさして変わらぬ野蛮な者たちの土地であり、そして、かの地の者がいかに財力を持っているとしても、生業としているのは、ローマの貴族たちが手を染めることのない商業や卑しい職業であり、所詮は品位に差がある、といったところであつた。そして、このような地方からやってきた新参者を、ローマの貴顕紳士たちは冷たい軽蔑の目で見たのである、ピーソーの例に見るように、それはローマの住人となつた子孫にまで及んだのである。

トランスパダーナのような地方出身の人間に対するローマ人の抱いたイメージと偏見がこのようなものだとすると、クローディアがその一員であつた名門中の名門たるクラウディウス家の人々にとつて、カトゥッルスがどのように映つたかは容易に想像できる。確かに裕福であり、豊かな教養も身についているし、名士との縁故もある²⁶が、しかし、商業活動にいそしんでいるトランスパダーヌス人にすぎないというのがカトゥッルスであつた。クローディアとの出会いの経緯は知られないが、彼我の格差をはつきり意識したクラウディウス家の人々によつてカトゥッルスが丁重に扱われたとは考えられないだろう。むしろ蔑みの目を向けられたかもしれない。それだけに、密会ながら友人の提供してくれた家でクローディア・レスビアと逢瀬を果たしたときのカトゥッルスの喜びはいかに大きなものであつたことか。それは第六八歌で表現されている。

is clausum lato patefecit limite campum,
isque domum nobis isque dedit dominae,
ad quam communes exercemus amores.
quo mea se molli candida diua pede
intulit et trito fulgentem in limine plantam
innixa arguta constituit solea,

彼は閉じられた野を広い道によつて開いてくれた、そして彼はぼくと女主人に家を与えてくれた、そこでぼくたちが相互の愛の営みを行なえるように。その家へと、ぼくの輝ける女神は柔らかな足どりで身を運び、すり減つた敷居にきらめく足を置いた、かん高い音をたてるサンダルに身を乗せて（第六八歌b、六七―七二）

レスビアがまさにカトゥッルスの待つ家に入ってくる瞬間を詩人は捉えている。彼女は「女主人」と呼ばれ、さらに「輝ける女神」とまで高められている。彼女は詩人にとつて文字通り神々しい美しさと光輝と品位を具えていた。しかし、ここで重要なのは「家」である²⁷。のちの恋愛詩人たちが恋人を指して常套的に使う言葉「女主人 (domina)」は、ここでは文字通りの意味で使われている。そして、家に入る瞬間の彼女を、結婚の儀式に則り花婿の待つ新居に迎え入れられる花嫁として詩人は思い描いている。そのことは、このあとに導入されるラーオダメイアとプロテーシラーオスの神話も示している。このように夫婦であるかのように夢想されている二人の交わす愛は

「相互の (communes)」と表現されている。先に見たようなカトウツルスが受け継いでいたであろう道徳観にあつては、人間の生活において家庭が何よりも大切であり、すべての基盤であつた。出自の違い、社会階級的格差のあるクローディアに対して、詩人は敢えて二人の逢瀬を、対等の相互の関係としての結婚にまで高めて見せている。実際、そのような詩人の夢想を可能にするような歓喜のときをレスビアはもたらしてくれたのであろう。カトウツルスが考える恋愛が永続的に成り立つためには、家というものが欠かせない、あるいは、家に至る必要があつたのである。

しかし、現実に戻れば、カトウツルスが恋愛の理想として描く、夫婦のようなカトウツルス一人との関係に、レスビアは必ずしも十分に応えてくれる人ではない。そのことは、この詩の後半の「彼女はカトウツルス一人に満足はしていないが、節度を知る女主人の数少ない浮気は我慢しよう」(一三五―六)という忍従の言葉が示すように、詩人も認識している。レスビアがカトウツルスの詩における表象であつて、必ずしも実在のクローディアをそのままに映しているわけではないように、歴史上のクローディアの実像もそれほど明確には知ることができない。キケローが『カエリウス弁護』において彼女の暮らしぶりを如実に描き出し、快樂生活にふけり、極めてふしだらな性的行動を恥じることのない女性という姿を実に説得的に浮かび上がらせているが、依頼人のために告発者を過度に中傷、批判することは常套であつたろうし、彼女がキケローの政敵クローディウスの姉であるとなればなおさらであつた。したがって、キケローの描くクローディア像も疑つてかからねばなら

ないが、しかし、この共和政末期の時代に、ギリシアから入ってきた快樂生活と遊女の風俗がもたらした男女の関係の変化に刺激されて、ローマの貴婦人の中にも家を離れ、より自由に遊女的な行動をする者たちが数多く見られるようになったのは事実であり、クローディアはそのような女性たちの典型とも言えるだろう²⁸。そしてまた、ローマという都市全体に見られた多大な贅沢と華美に傾く退廃的風潮ということがあつた。歴史家サッルースティウスは、同時代を揺るがす大事件であつたカティリーナによる陰謀を記述した『カティリーナ戦記』の中で、「さらには、全市民の墮落した行状が(カティリーナを)駆り立てていた。極めて有害で相反する悪徳である浪費と貪欲とが、全市民の行状を害していたのだ。」(第五節八)と述べて²⁹、事件の背景となつたローマ人全体の道徳的墮落の主因として「贅沢」と「貪欲」を挙げている。クローディアのふるまいは、共和政の行き詰まりの中で属州として領土を広げ、莫大な富を集めるようになったローマ国家の首都ローマに漲つていた時代的空氣に同調したものとも言える。

いまだ生新の氣にあふれるフロンティアの地よりやつてきたカトウツルスは、このようなローマの空氣になじみはしなかっただろう。それが、彼が素直なローマ化を避けた所以ではなかっただろうか。しかし同時に、クローディアとの恋を可能にしてくれたのは、そのローマの風潮でもあつた。クローディアの行動は、結局はカトウツルスにとって受け入れがたいものであつた。クローディアとの関係は、ウェーローナで人々の生活を律していた古風な道徳とおよそ相容れないものであり、カトウツルスが身につけていた商人の感覚からしても「割に合わ

ない」ものであった。このように考えるのは、ローマの都市文化を生きる者たちからすれば、田舎者の野暮ということではかなかつただろう。しかし、カトゥッルスにとつては、アミーキティアのルールを逸脱することは、せつかく可能になった新しい恋愛の永続性を閉ざしてしまうことになるのである。ところが、クローディアとの関係を簡単に断ち切れるかというところではなく、詩人はいつそう彼女に魅惑され、恋情はかき立てられてしまうのであった。それが冒頭で示したようなアンビヴァレンスを表現したエレゲイア詩を生むことになったのである。しかし、やがてレスビアは次のように歌われることになる。

Caeli, Lesbia nostra, Lesbia illa.
illa Lesbia, quam Catullus unam
plus quam se atque suos amavit omnes,
nunc in quadrivitis et angipennis
glubit magnanimi Remi nepotes.

カエリウスよ、ぼくのレスビア、あのレスビアなのだ。カトゥッルスがただ一人自分よりも、自分の近親の者たちすべてよりも愛したあのレスビアが、今では辻や路地裏でレムスの気高い子孫たちの皮を剥いでいるのだ。(第五八歌)

「輝ける女神」と賛美されたレスビアは、ここでは売春をこととして街路に立つ女たちの一人として表象されている。そして同時に、そのようなレスビアに食い物にされているレムスの栄

えある末裔であるローマ人たちの品位も地に落ちている³⁰。

四 カトゥッルスのアンビヴァレンス

カトゥッルスと彼の詩において故郷ウェーローナと都ローマが交錯しているさまを見てきた。ウェーローナ自体、開拓地および商業基地としての活気ある新しさを持ち、他方では古来の道徳観念が生きていて、新旧の両側面を具えていた。ローマは、恋愛ということだけに限って言えば、新しい男女の関係の可能性を開いていたが、それは道徳的退廃と表裏のものであった。カトゥッルスを魅了したレスビアの美と魅力は、まさしくローマという都市でなければ見出せないものであった。そして、カトゥッルスがローマにやってきたとき、ローマ人が遠い昔から生活の掟としてきた道徳が、イタリアの地方を経由して甦り、現代のローマの退廃的美と出会うことになった。さらにそこには、古い掟と枠組みが取り払われた広いヘレニズム世界で商人として活動する人間が、恋愛における男女の関係をひとつの契約関係として見るような視点も働いている。こうした相互作用の末に生まれてきたのが、カトゥッルスにおけるアンビヴァレンスの表現であった。ものの外面よりも内面に目を向けようとする³¹。カトゥッルスによる、自己の心を凝視した真の抒情詩の初めての誕生には、このような時代の趨勢の働きも見ることができるだろう。

ローマに住みつくようになったカトゥッルスにとって、なおも家郷が重要な意味を持っていたことは、いくつかの詩の

中で兄の死に触れて痛切に悲しんでいること、とりわけ第六八歌の次の言葉がよく示している。

tu mea tu moriens fregisti commoda, frater,
tecum una tota est nostra sepulta domus,
omnia tecum una perierunt gaudia nostra,
quae tuus in uita dulcis alebat amor.

あなたは死んでわたしの仕合わせを打ち壊したのです、兄よ、あなたとともにわたしたちの家はすべて葬られ、わたしたちの喜びはすべてあなたとともに失われた、その喜びは生きていたときにあなたの甘き愛が養い育てたもののな。(第六八歌 a、二二―四)

しかし、ローマの美を知ったカトウツルスはもはや故郷に戻ることにはできない。同じ詩の中で、ウェーローナにいる詩人は自分のために恋愛詩を書いてほしいと願う友人に、今はそれができる状況ではないと断って、

nam, quod scriptorum non magna est copia apud me,
hoc fit, quod Romae uiuimus: illa domus,
illa mihi sedes, illic mea carpitur aetas;

というのも、手許にある書物は多くはないのだ。それはぼくがローマに住んでいるからだ。あれこそわが家、あれこそわが住処、あの地でわが人生の時は費やされる。(三三―五)

と言うのである。文脈としては詩作の場としてのローマのことが言われている。兄の死によってウェーローナの「家」を失ったカトウツルス、そして、今や商人でもなく政治家でもなく詩人となったカトウツルスにとつて、生活の場はローマであり、ローマこそ「家」である。しかし、詩人という選択が示しているように、カトウツルスは完全にローマ化を果したわけではないだろう。彼の詩作においてウェーローナという家郷は依然として生き続けていただろう。

注

- (1) カトウツルスのテキストは、R. A. B. Mynors (ed.), *C. Valerii Catulli Carmina*, Oxford 1958, repr. 1980 に従った。
- (2) R. O. A. M. Lyne, *The Latin love poets : from Catullus to Horace*, Oxford 1980, 67.
- (3) 中山恒夫『ローマ恋愛詩人の詩論：カトウツルスとプロペルティウスを中心に』東京：東海大学出版会、1995, 43-55. Lyne, *op. cit.*, 24ff.
- (4) C. J. Fordyce, *Catullus : a commentary*, Oxford 1961, repr. 1990, 397.
- (5) K. Büchner, *Römische Literaturgeschichte : Ihre Grundzüge in interpretierender Darstellung*, Stuttgart 1957, 228ff.
- (6) ウェーローナの西にペーナークス湖（現ガルダ湖）があり、その湖中の半島の先端シルミオーにはカトウツルスの別荘があった。第三一歌ではこのシルミオーを歌っている。兄の死については、第六五歌、第六八歌、第一〇一歌で言及がある。

- (7) 当時の属州総督ユリウス・カエサルを屋敷に招いてもてなしたことから、地方の名家であったことは窺える。
- (8) 第三九歌一三行。
- (9) Livius, *Ab urbe condita*, 5.35.1.
- (10) 「ラテン植民市」の入植者はローマ市民権を放棄し、制限された市民権であるラテン権 (*ius Latinum*) を与えられて自治を行なった。
- (11) のちの帝政期の作家小プリニウスは、北イタリアのコームム(現コモ)が生地であり、トランスパダーナの出自に対する誇りとこの地方に古きよき道徳が残っていることを語っている。『書簡集』1.14参照。
- (12) Fordyce, *op. cit.*, xi.
- (13) T. R. Wiseman, *Catullus and his world : a reappraisal*, Cambridge 1985, repr. 1990, 110f.
- (14) ブリクシア出身のヘルウィウス・キンナ、メディオラーナム出身のコルネリウス・ネポース、マントウア出身のウェルギリウスなど。
- (15) モムゼン『ローマの歴史Ⅱ』(長谷川博隆訳)、名古屋・名古屋大学出版会、2005, 340f.
- (16) 注(11)参照。
- (17) いつ都市計画が実行されたかについては、紀元前八九年とする説と四九年とする説がある。四九年だとすると、カトゥッルスが生きていたときにはウェーローナはまだ都市の景観を持っていなかったということになる。岩井経男『ローマ時代イタリア都市の研究』京都・ミネルヴァ書房、2000, 189-200.
- (18) Lyne, *op. cit.*, 1-18.
- (19) 小アジアのビーテューニアにおける兄の客死も、商業活動の中でのことであったかもしれない。
- (20) 第一三歌、第二六歌、第四一歌、第一〇三歌など。
- (21) 長谷川博隆『古代ローマの政治と社会』名古屋・名古屋大学出版会、2001, 465f.
- (22) Fordyce, *op. cit.*, 119.
- (23) Wiseman, *op. cit.*, 158.
- (24) 「あるインスブレース人がいて、商人であり、競売人もやっていたが、この男は娘をひとり連れてローマにやって来ると、名門の家柄の青年で、盗人として悪名高き男カエソーニヌスの子息である者に、わざわざ接近し、……軽薄で短慮なこの青年に、娘を嫁がせた。このインスブレース人は、カルウェンティウスという名だったそうだ。」(『ビーソー弾劾』断片92、『キケロー選集2』東京・岩波書店、山沢孝至訳、2000より、以下の訳も同様)。
- (25) 六二節。競売人はローマでは軽蔑されていた職業であった。カルウェンティウスをメディオラーナムのインスブレース人とするのはキケローの歪曲と思われる。
- (26) ユリウス・カエサルやメンミウスと知己であったことなど。
- (27) 拙稿「カトゥッルスの家——第六八歌——」、『東京外国語大学論集』52 (1996) 参照。
- (28) Lyne, *op. cit.*, 15f.
- (29) *Incitabant praeterea corrupti ciuitatis mores, quos pessuma ac diuorsa inter se mala, luxuria atque auaritia, nexabant.*
- (30) K. Quinn, *Catullus : the poems*, Basingstoke / London 1973, 260.
- (31) 中山、前掲書、30f.